

## 編 集 後 記

編集委員となって約1年が経過し、2回目の編集後記を書くことになった。日本消化器外科学会雑誌には最近、症例報告の投稿が多くみられる。私は症例報告が論文の原点であり、読者に対する重要な情報の提供と自らの知識の整理のために完成度の高い症例報告を書くことは非常に重要と考えている。そこで今回は投稿された症例報告を読ませていただき、思うところを述べることにする。

症例報告で必要な要素はその症例が稀であることの証明、報告する意義、報告症例の十分かつ簡潔な記述と考えられる。報告症例が報告数、診断、治療など何らかの点で報告するのに価値のある稀な症例であることが最も重要で、この点を明らかにするには当然、現在までの同様の報告例を集計する必要があり、本邦、欧米の報告例の特徴をまとめて読者に説明する。この際には必ず自分がどのような方法で現在までの報告例を集計したかを述べる。これらの点を加味してその症例報告を最終的に臨床面でどう役立てていくかを結論として述べることにより、症例報告の意義があると考えられる。

最近の投稿された症例報告で多く見られるのは、報告する意義のある稀な症例であることの記載が不十分、現在までの症例の集計の方法が明らかでない、症例の集計とまとめが不十分、欧米の集計がされていない、その症例報告の臨床面への貢献の考察が不十分などの点である。これらの点を指摘した後の再投稿原稿の多くは的確に加筆、訂正されていることが多いことから、初回投稿時からこれらの点に留意して完成度の高い症例論文を目指して頂きたいと思う。もうひとつ気になる点は、共著者で論文の指導をする立場にある先生方の指導が十分でないと思われる論文が少数ではあるが存在することである。厳しい医療情勢の中で医師の仕事量は着実に増えるにつれて若い医師を指導する先生方の忙しさも倍増するこの頃であるが、若い先生方の荒削りではあるものの活力のある文章の校正、指導をお願い致したいと思う。

少し堅い文章になってしまったことをお許しいただき、是非、診断、治療に役立つ症例報告を送っていただきたいと思う。投稿論文を読んで先生方の考えを聞かせて頂くのを楽しみにしている。

( 杉田 昭 )